

【研究掌記】

『玉勝間』卷一〇「おのが帰雁のうた」考

膽 吹 覚

本居宣長『玉勝間』卷一〇（享和四年〔一八〇四〕刊）に「おのが帰雁のうた」（六一九）と題する掌篇がある。その全文を左に引用する。なお(a)(b)(c)の記号は以下の論述のために筆者が付したものである。

おのが帰雁のうた

帰雁の題にておのれ、

(a) 春くれば霞を見てやかへる雁われもとそらに思ひ
たつらむ

いまひとつ、

(b) かへるかりこれもこしぢの梅香や風のたよりにさ
そひそめけむ

とよめりける。後なるをよく思へば、末の二句に、雁の縁なくて、いかにぞやおほえければ、又とかく思ひ

めぐらして、

(c) うめがかやさそひそめけむかへる雁これも越路の
風のたよりに

となんよみなほしける、こはしも、こしぢを末の句に
うつしたるにて、雁の縁はさることながら、歌ざまは、
いささかおとりておほゆるは、いかならむ、歌よく見
しれらむ人、さだめてよ、

この一篇には宣長が「帰雁」⁽¹⁾という題で詠んだ和歌三首
が記され、その末尾に「歌よく見しれらむ人、さだめてよ」
とある。そこで本稿では宣長の求めに応じて、聊か私見を
述べてみたい。

まず宣長の歌稿である『石上稿』を見ると、(c)が寛政九

年（一七九七）の詠草として、

帰雁

うめがかやさそひそめけむかへる雁これもこしぢの風のたよりに

と記録されている。この歌と(c)とは本文に異同は見られない。(a)は『石上稿』には見られないが、『石上稿補遺』の寛政九年（一七九七）の詠草の中に、

帰雁

春くれば霞をみてやかりがねの我もと空に思ひたつらん

と記載されている。ここでは第三句が「かりがねの」となっている（傍線は筆者が付した。以下、同様）。(b)は『石上稿』にも『石上稿補遺』にも収録されていない。このように見てくると『玉勝間』収載「おのが帰雁のうた」の一篇は、宣長は寛政九年（一七九七）の春に詠んだ歌について述べたものであることが知られる。寛政九年（一七九七）は、宣長は六八歳である。彼はこの年の三月には『美濃の家づと折添』を、五月には『古事記伝』第三帙（卷一三・一七）・『古今集遠鏡』・『天祖都城弁弁』を相次いで刊行し

ている。

次に宣長の歌集である『鈴屋集』を見ると、その巻一「春歌」に「帰雁」と題して五首を並べ、その第一首に(a)を

帰雁

春来れば霞を見てやかりがねの我もと空に思ひたつらむ

と載せている。ここでも第三句は『石上稿補遺』と同じく「かりがねの」となっている。『鈴屋集』に収録されたものが最終的な形であるとすれば、『玉勝間』収載「おのが帰雁のうた」は、『石上稿』及び『石上稿補遺』に記録される以前の段階、すなわち宣長が「帰雁」という題を前にして試行錯誤しながら歌を詠んでいる様子を描いたものであるということが知られるのである。なお(b)と(c)は『鈴屋集』には載録されていない。

『石上稿』を見ると、宣長は寛延三年（一七五〇）、宣長（二一歳）から享和元年（一八〇一）、宣長はこの年九月に七二歳で死去）までの約五〇年間にわたって、「帰雁」或いは「帰雁」を含む歌題（「夕帰雁」や「帰雁連雲」など）をほぼ毎年のように詠んでいる。また、それらは嶺松院歌会

をはじめとする松坂での歌会で兼題或いは当座題として詠まれたものが多い。その例として、宝暦十二年（一七六二）三月十一日の嶺松院歌会と安永元年（一七七二）二月五日の稲掛棟隆宅での歌会を挙げておく。

三月ノ十一日 嶺松院 兼題 帰雁

これも又風ふきとちよ春の雁かへるさいそぐ雲の通ひ路
さきそめてあかぬ別を思へばや花よりさきにかへる雁
がね

二月十五日 帰雁不駐 棟隆家会

風絶て雲の通路とどむべき方こそなけれ春の雁がね

「帰雁」という題は、宣長にとって長年にわたって詠み慣れた題あり、且つ彼の歌人仲間にとっても同様であったことが窺える。『鈴屋集』巻一「春歌」には「帰雁」の題で五首、「暁帰雁」「海辺帰雁」などの「帰雁」を含む三字或いは四字の題を含めると計一七首が収録されている。

「雁」を詠んだ和歌について小島憲之は『古今集以前』（増選書、昭和五十一年刊）に次のように述べている。

雁は、秋風と共に日本列島に飛来し、冬を経て春霞

の中をもとの北方へ帰る。この渡り鳥について、中国の詩では、前者を「秋雁」「来雁」などと呼び、後者を「春雁」「帰雁」などと呼ぶ。『万葉集』の歌は、前者の「秋の雁」が殆んど全部を占め、後者の「春の雁」の歌は、わずか三首に過ぎない。むしろこれは例外であり、万葉人一般には春に去る雁は殆んど文学意識の対象にはならなかったのである。これに對して、『古今集』前後の歌には、秋の来雁と共に春の帰雁も現われる。春霞のこめるころ、日本の花を見捨てて北の国へ帰りゆく帰雁を意識する歌は、やはり中国の詩、及びその影響下にある平安朝の詩のひそみにならったものといへる。

小島が指摘する通り「雁」を詠んだ和歌は「秋の雁」と「春の雁」の二つに大別できる。共に中国の漢詩の影響下で生まれたものであるが、『万葉集』ではその殆んどが「秋の雁」を詠んだ歌で、「春の雁」を詠んだ歌は伴奏家持の二首を含めた三首に過ぎない。「春の雁」を詠むことは『古今集』以後に盛んになったと見てよいだろう。「帰雁」を詠んだ歌は二一代集では六九首あり、八代集に限るとその

数は二一首である。⁽³⁾

勅撰集に掲載された「帰雁」を詠んだ歌を見ると、小島が指摘するように「日本の花を見捨てて北の国へ帰りゆく」光景を詠んだものが多い。その用例を数首挙げてみよう。

帰雁をよめる 馬内侍

とどまらぬ心そ見えん帰かり花のさかりを人にかたるな

〔後拾遺集〕卷一春上・七〇

帰雁をよめる 弁乳母

おりしもあれいかにちぎりてかり金の花の盛にかへり

そめけん

〔後拾遺集〕卷一春上・七二

帰雁をよめる 贈左大臣母

ふるさとの花のにほひやまさるらんしづ心なくかへる

かり金

〔詞花集〕卷一春・三二

帰雁をよめる 源忠季

中なかにちるを見しとやおもふらん花のさかりにかへ

るかりがね

(同右・三三)

これらの和歌に詠まれた「花」はいずれも桜と見てよいだろう。すなわち、今を盛りと咲き誇る桜を見捨てて北へと帰る雁というイメージである。勿論これらの歌は題詠であり、必ずしも実景を詠んだものではない。

ここで再び宣長の(a)を見てみよう。その歌意は、春が来れば雁は霞を見て北へ帰る時節を知るのだろうか、次々に我もと空へと飛び立とうとしている、といったところであろう。その初句「春くれば」は「雁」を詠んだ歌でしばしば使用されている。勅撰集では次の三例を挙げることができる。

かりのこゑをききて、こしへまかりける人を思て
める

凡河内躬恒

春くれば雁かへるなり白雪のみちゆきふりにことやつ
てまし

〔古今集〕卷一春歌上・三〇

堀川院の御時、百首の歌のうち、帰雁の歌とてよ
める

源俊頼朝臣

春くればたのむのかりもいまはとて帰る雲路に思ひ立

なり

〔千載集〕卷一春歌上・三六

配所にて帰雁を聞てよみ侍ける

前権少僧都全真

うらやましいかなる雁の春くればもとのこし路に立帰
るらん

〔玉葉集〕卷八旅歌・一二三二

(a)の第三句「かへる雁」も「帰雁」の題で読まれた和歌
でよく使われる言葉である。その例として次の二首を掲出
しておく。

帰雁をさきて

よみ人しらず

かへるかり雲ぢにまどふ声す也霞ふきとけこのめ春風

〔後撰集〕卷二春歌中・六〇

帰雁をよめる

赤染衛門

かへるかり雲ゐはるかに成ぬなり又こむ秋も遠しとお
もふに

〔後拾遺集〕卷一春上・六八

また、(a)の第五句「思ひたつらむ」も『新統古今和歌集』

に次の一首が認められる。

貞和百首歌に

前大納言実教

ちる花もねにこそ帰れこしちまでいかなる雁の思ひ立
らん

〔新統古今集〕卷一七雑歌上・一六三〇

このように(a)の「春くれば」「かへる雁」「思ひ立つらむ」
は、いずれも勅撰集に収録された「雁」を詠んだ歌で使用
された言葉である。その一方で(a)は勅撰集に収載された
「帰雁」を詠んだ歌とは違う趣向も見せている。(a)は「雁」
が霞を見て北へ帰る時節を知る(「霞をみてやかへる雁」)
と詠んでいる。雁が春霞の立つ頃に北へと飛び立つ様子を
詠んだ歌は勅撰集に多く見られる。その中から『古今集』
収録の伊勢の和歌一首を引く。

帰雁をよめる

伊勢

春霞たつを見捨てゆく雁は花なき里にすみやならへる

〔古今集〕卷一春歌上・三二

伊勢のこの歌は春霞が立ち込める時節に雁が北へ帰る様
子を詠んだもので、雁が霞を見て北へ帰る時節を知るとは

詠んでいない。管見に従えば勅撰集に収録された「帰雁」を詠んだ歌六九首の中に雁が霞を見て北へ帰る時節を知るといふ内容の歌は一首もなかった。それではなぜ宣長は「霞を見てやかへる雁」と詠んだのであろうか。

勅撰集で「霞を見てや」を使用した歌は『新千載集』に収録された大中臣能宣の一首のみである。

清慎公七十賀屏風歌

大中臣能宣朝臣

花さかぬときはの山のうぐひすは霞を見てや春を知らん

〔『新千載集』卷一春歌上・二二八〕

右の歌意は、花が咲かない常盤山の鶯は霞を見て春を知るのだろうか、といったところであろう。この歌では鶯が霞を見て春を知ると詠まれている。宣長は能宣の「花さかぬ」の一首を踏まえて、その鶯を雁に置き換えて(a)を作ったのではないだろうか。

宣長は『鈴屋集』では(a)の第三句「かへるかり」を「かりがねの」と改めている。これは「かへる」と第五句「思ひ立つ」が意味の上で重複する——ともに雁が北へ向かう行動を意味する——ためかと考えられる。宣長は(a)の第三句を「かりがねの」と改めたものを『鈴屋集』巻一「春歌」

の「帰雁」と題する五首一群の第二首に置いた。宣長にとつて(a)は「帰雁」を詠んだ和歌の中でも自信作であつたようである。

次に(b)の歌を見てみよう。(b)の歌の大意は北へと帰る雁は越路の梅の香りを乗せた風のたよりに誘われたのだろうか、といったところであろう。宣長は(a)では雁が霞を見て北へと飛び立つと詠んだが、(b)では雁が越路(北陸地方)から届く梅の香りに誘発されて旅立ったと詠んでいる。同じ「帰雁」であるが、「帰雁」の理由が(a)は雁の視覚(霞)に、(b)は雁の嗅覚(梅香)に求められている。しかし、前述の通り『古今集』以後の勅撰集においては「帰雁」は満開の桜の時節に京都を発ち、北へと向かう姿を詠むのが一般的である。勅撰集で「帰雁」を詠んだ歌を調査しても(b)のように雁と梅を取り合わせた歌はない。

(b)の第四句「風のたよりに」であるが、この言葉は勅撰集では梅の花、そして鶯との組み合わせで読まれることが多いようである。その用例を勅撰集から三首掲出する。

寛平の御時、后宮の歌合の歌 紀とものり

花のかを風のたよりにたぐへてぞ鶯さそふるべには
やる

題しらす

〔古今集〕 卷一春歌上・一三
中納言兼輔

宿ちかくにははざりせば梅の花風のたよりに君をみま
しや

〔新後撰集〕 卷一春歌上・五〇
天徳四年内裏歌合に、鶯 中納言朝忠

我宿の梅がえになくうぐひすは風のたよりにかをやと
めこし

〔玉葉集〕 卷一春歌上・四二

宣長は右の用例を踏まえて、ここでもまた(a)と同じくその鶯を雁に置き替えて(b)の歌を作ったのではなかったろうか。京都で桜が満開を迎える頃、越路では漸く梅が咲き誇る時節を迎える。越路の春は京都の春よりおよそ一月遅れて訪れる。宣長はこうした現実世界での春の訪れの遅速を取り入れて、(b)では雁が越冬地である京都の桜ではなく、その故郷である越路の梅の香りに誘われて、北へと故郷へと飛び立つ姿を詠んだのではなかったろうか。梅の香りが故郷を想起させることは、紀貫之や菅原道真などの古歌にも多く読まれている。

宣長は『玉勝間』で(b)の下句について「末の二句に、雁の縁なくて、いかにぞやおぼえければ」と記している。彼は「風のたよりに」と「さそひそめけむ」が「雁」と縁がない言葉である、と自ら批判しているのである。⁽⁴⁾「風のたよりに」は前述の通り、梅と鶯との組み合わせで読まれることが多い。また第五句「さそひそめけむ」は二一代集では『新後撰集』の次の一首しか用例がない。「さそひそめけむ」もまた「雁」とは縁の少ない言葉といってよいだろう。

だいしらす

前大納言基良

さても又いかなる夜半の月影にうき面かけをさそひそ
めけん

〔新後撰集〕 卷一四恋歌四・一〇六九

「雁」に縁がある言葉と言えば、勅撰集を概観しただけでも「花」「雲」「空」「霞」「ふるさと」「こしぢ」「つばさ」「忘る」「契る」などが挙げることができる。(b)の下句には確かにこうした言葉は見られない。そこで宣長は(b)を推敲し(c)とする。しかし、(c)は宣長が「こはしも、こしぢを末の句にうつしたるにて、雁の縁はさることながら、歌ざま

は、いささかおとりておぼゆる」と記す通り、(b)の第三句「これもこしぢの」を(c)の第四句に、(b)の第五句「さそひそめけむ」を(c)の第三句に、それぞれ移しただけである。(b)で難点とされた「雁」と縁のある言葉が新たに入ったわけではない。しかも、このように入れ替えて見ると、(c)の方が「歌ざまは、いささかおとりておぼゆる」と宣長は言うのである。(c)は第一句で「うめがかや」と詠嘆したことにより、「かへる雁」よりも「うめがか」が一歩前に出てしまい、「帰雁」の題詠歌としては整合性に欠ける結果となっている。宣長が「歌ざまは、いささかおとりておぼゆる」と評したのは、こうした点ではないだろうか。しかし、こうした逡巡にも関わらず、宣長は『石上稿』には(b)ではなく、(c)を書き留めている。ただし、その後(c)が『鈴屋集』に収録されることはなかった。

福井久蔵は宣長の和歌について「洗練と技巧とを旨とするその作は洵にととのつてゐるが、素朴や適勁は求めがたく、新味に乏しい感がある⁽⁵⁾」と述べている。これは宣長の和歌に対する今日的な評価でもあらう⁽⁶⁾。『玉勝間』に収録された宣長の「帰雁」を詠んだ三首も勅撰集を軌範とし技巧に苦心している点が確認される。その点に於いてこの三

首もまた前掲の評価を受けるべき作品であるといえるだろう。その一方でこの三首に新味を認めることも可能である。この三首はいずれも雁が北へ帰るきっかけに焦点が当てられている。具体的には(a)は霞に、(b)(c)は梅香に、そのきっかけを求めている。前者は視覚的誘因であり、後者は嗅覚的誘因である。雁が帰るきっかけに着目した歌は、私が調べた限り勅撰集から見つけることはできなかった。その意味において宣長の詠んだ三首はいずれも新しい趣向が取り入れた歌であると評価できるであらう。ただし、こうした趣向を取り入れた結果、これらの歌が「帰雁」の因果関係を説明した理屈っぽいものとなり、やや情趣に欠けるものとなってしまったことも指摘しておかなければならない。

『玉勝間』収録「おのが帰雁のうた」を読むと、「帰雁」という題を得て、真面目に楽しそうに試行錯誤を繰り返す歌人・宣長の姿が看取される。大久保正は「古歌を範とする詠出態度が彼の歌を窮屈にしたことは否めないが、それは宣長にとって十分に楽しみであり得たし、逆にそのことによって彼の詠歌が学問につながるものであり得た事情も見落とすことはできない⁽⁷⁾。」と指摘しているとおり、宣長にとって歌を詠むことは楽しみであり、学問に通じる営み

であつた。鈴屋門人や嶺松院歌会の会員が「おのが帰雁のうた」を読んだならば、古歌を範とし倦まず怠らず楽しそうに歌を詠み続けた、今は亡き宣長の姿をそこに髣髴とさせたことであろう。宣長は「おのが帰雁のうた」の末尾に「歌よく見しれらむ人、さだめてよ」と読者に語り掛けている。宣長を知る人は彼のこの誘いに応じて「帰雁」を詠んだ古歌を調べ、宣長の「帰雁」を詠んだ歌について検討し批評したであろう。「おのが帰雁のうた」と題する掌篇は、こうした読者からの歌評（応答）を得て完結する文章である。拙稿も亦その歌評の一つである。

注

- (1) 「帰雁」を詠んだ詩歌に関しては、小島憲之『古今集以前』（塙選書、昭和五一年刊）をはじめ、楊昆鵬「かへるかり」と「帰雁」——和漢聯句における和漢の融合——」（『国語国文』第七六巻二号、京都大学文学部国語国文学研究室、平成一九年二月刊）、恵阪友紀子「日本における帰雁詠——『源氏物語』須磨巻「うらやましきは帰るかりがね」をめぐって——」（『京都語文』第二三号、佛教大学国語国文学会、平成二八年一月刊）参照。

『玉勝間』巻一〇「おのが帰雁のうた」考

(2) 小島憲之『古今集以前』一七ページ。

(3) 国文学研究資料館作成「二二代集データベース」を使用した。以下の検索も同様である。

(4) 岡本正行は「本居宣長——二条派の歌人——」（『国文学解釈と鑑賞』平成八年三月号）で、「おのが帰雁のうた」を取り上げて、宣長が縁語に留意して詠出していることを指摘している。

(5) 福井久蔵『近世和歌史』、成美堂、昭和五年刊、二七〇ページ。

(6) 『本居宣長全集』第一五巻「解題」（大久保正担当）、久松潜一『近世和歌史』（東京堂出版、昭和四三年四月刊）、山下久夫『本居宣長』（『コレクション日本歌人選』五八巻、笠間書院、平成二九年七月刊）参照。

(7) 『本居宣長全集』第一五巻「解題」九ページ。

〈付記〉

本稿に於ける本居宣長の著作からの引用は筑摩書房版『本居宣長全集』から引用した。また二二代集は国文学研究資料館作成「二二代集データベース」から引用した。

（福井大学准教授）

《キーワード》

本居宣長 玉勝間 近世隨筆 近世和歌 歸雁